

## 迷宮入りの弟子たちに聞こえた御言葉

ルカ24:13~35 / 李正雨師

最近、うちの長男が私によく使っている言葉があります。「ひどい」という言葉です。去年までうちの長男は下校したら、夕食を食べる前までスマートフォンゲームをしたり、テレビを見たりしていました。そして、夕食を食べてから学校の宿題や勉強をしました。ところが、夕食を食べると眠くなり、目がぼんやりとしていたので、これは効率的ではないと思いました。それで4年生になってからは、下校の後、おやつタイムを持った後、すぐに宿題や勉強をさせました。そして、夕食を食べた後に遊ぶようにしました。しかし、長男はこの方法が気に入らないようです。学校で勉強して帰ったのに、また宿題と勉強するのは、適切ではないと思っているようです。長男の考えも一理ある言葉だと思いますが、夕食を食べると眠くて勉強をしていない日も多いので、下校したらまず宿題と勉強をなさいと言っています。すると、いつも「ひどい」と言われます。それで私は、最近「ひどいパパ」になりました。子供がやりたい通りに、子供の思い通りにしてやったら、私は「ひどいパパ」にはならなかったのです。しかし、お父さんなら子供の願い通りだけにしてやらないでしょう。必要によっては、統制したり、拒否したり、説得したり、教えたりするでしょう。子供の願い通りだけにしてやらないのは、子供のためということです。

私は、この考えが今日の福音書でも、ある程度は適用できると思います。今日の福音書は、クリスチャンにとって非常に有名な箇所です。エマオに向かっている二人の弟子たちの話です。彼らは、エルサレムで起こったこと、イエス様のことについて話しながら、エマオに向かって歩いていました。しかし、彼らの表情は、明るくありませんでした。17節によると、復活されたイエス様が彼らに「やり取りしているその話は何のことですか」と尋ねられた時、彼らは暗い顔をして立ち止まりました。そして、彼らはエルサレムで起こったことを言いましたが、彼らの話には絶望感がにじみ出ていました。彼らは、イエス様の復活の話もしましたが、復活を信じられないようなニュアンスで話します。ただイエス様の死が切なくて、自分たちの期待が外れたというふうに言います。信仰が迷宮入りになってしまったのです。なぜ、彼らはイエス様の死について絶望的だったのでしょうか。なぜ、復活を積極的に信じていなかったのでしょうか。私の考えは、自分たちの考えと当時エルサレムで起こったことがあまりにも違っていたからだと思います。

当時の状況を一度考えてみましょう。イエス様が十字架につけられて死なれた日は、過越祭の前日でした。ユダヤ人にとって、過越祭は解放の日です。神様はエジプトを裁き、これによってユダヤ人たちは、自分たちを治めていたエジプトから逃れることができました。これを記念する日が過越祭であり、イエス様は過越祭を迎えてエルサレムに行かれました。エルサレムでイエス様を迎え入れた人々、イエス様の入城を歓迎した人々は、過越祭の奇跡が自分たちにも起こるだろうと期待しました。イエス様を中心とした解放があるのだという期待でした。しかし、イエス様はこのような彼らの期待とは違って、十字架につけられました。そして、彼らが期待した奇跡は、少しも起こりませんでした。エルサレムにはどんな災いも下されず、葦の海を二つに分けた奇跡のようなことも起こりませんでした。ただイエス様の十字架と死の出来事が起こっただけです。このようなことは、イエス様を歓迎した人々、イエス様の弟子たちの信仰を揺さぶりました。だから彼らは、自分の元の生活に戻り、今日の福音書の弟子たちも迷宮入りしたまま、自分の生活の場に戻っているところでした。すべてのことが自分の考えや期待のままにならなかったからです。

イエス様に従っていた人々の絶望は、これから始まったのだと思います。自分たちの期待が満たされなかったということ、自分たちの願い通りにならなかったということです。彼らは、モーセの時と同じことが起こるようにと願っていました。自分たちのための裁きと奇跡が起こり、ローマから解放されるようにと願いました。しかし、このような願いは成らず、彼らは絶望しました。それで、みんなが自分の生活の場に戻り、また戻っている途中でした。おそらくその日のイエス様は、彼らにとって「ひどいイエス様」だったでしょう。彼らの願いが何も行われていなかったからです。

しかし、その日、何も起こらなかったわけではありませんでした。弟子たちの願い通りに行われなかったとしても、神様の御業が失敗したわけではなかったということです。モーセの時の裁きと解放は、再び行わ

れませんでした。イエス様によって罪と死は裁きを受け、これによってすべての人は解放されました。葦の海は分かれませんが、神殿の垂れ幕は二つに分かれました。ルカによる福音書23章45節の言葉です。「神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。」これは、神様と人間の間をふさいでいるすべての壁が崩れたという意味です。

しかし、弟子たちは絶望の中にいました。なぜなら、自分の考えに捉われており、自分たちの願い通りにならなかったからです。イエス様は、このような弟子たちところに来られ、彼らに聖書を明らかに説明してください。何が神様の御心なのか、なぜイエス様が苦しみを受けなければならなかったのかを説明してください。そしてこの説明によって、弟子たちは信仰の迷宮の中から抜け出し始めます。しかし、この過程の中で、不思議なことが起こります。弟子たちは、復活されたイエス様の存在を認識していなかったということです。弟子たちは、イエス様が聖書を解き明かされたときには、心は燃えていたと言いましたが、復活されたイエス様にすぐには気づきませんでした。なぜ弟子たちは、イエス様のことを気づかなかったのでしょうか。復活されたイエス様の姿が変わっていたからでしょうか。私の考えでは、この節は、ユダヤ人の伝統的な考えでは、つまり、世の中の視線では、復活されたイエス様を見分けることはできないということを示している言葉だと思います。

今日の福音書の著者は、復活されたイエス様を見分けられない弟子たちを通して、私たちに新しい理解を促しています。ユダヤ人の伝統的な考えやこの世の目では、復活の意味が分からないということです。私たちは、自分の考えを持ってイエス様に従っていた弟子たちが、皆自分の生活に戻ったということを実感しなければなりません。私の考え、私の期待を持ってイエス様に従ったら、私たちも、結局弟子たちのように自分の生活に戻るようになるでしょう。この世の基準では、神様の御心を図ることはできません。自分の考えに捉われていれば、復活されたイエス様を見分けることができないのです。ですから、イエス様は弟子たちに改めて聖書を説明してくださいました。何が裁きで、何が解放なのか、どんな奇跡が起こったのかを説明してくださいました。そして弟子たちにパンを裂いてお渡しになると、彼らの目が開け、復活されたイエス様を見分けることができるようになりました。イエス様の御言葉と聖餐が弟子たちの目を開かせたのです。

どうすれば神様の御心を知ることができるのでしょうか。何がこの世の考えで、何が信仰的なものでしょうか。私は、この質問に対する答えは、私たちが毎週行っている礼拝にあると思います。私たちは毎週説教を通して神様の声を聞き、聖餐式を通して復活されたイエス様と一つになっています。そしてこれらのことを通して、私たちはますます神様の道に導かれていると思います。時には、私たちも弟子たちのように、私たちの考えや期待によって信仰の迷宮に陥ることがあります。自分の願い通りにしてくださらない天の父をひどいと思うこともあります。しかしそのたびに、私たちは礼拝を通して神様の言葉を聞くことができます。迷宮の中にいた弟子たちに聞こえたイエス様の御言葉のように、毎週行っている私たちの説教と聖餐は、私たちの良い答えになってくれるのです。

今日の福音書33～34節にはこう書いてあります。「そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。」聖餐によって目が開いた弟子たちは、エルサレムに戻り、弟子たちと再会します。これは、聖餐のもう一つの役割である信徒の交わりを示していると思います。イエス様のパンは、私たちがイエス様と一つになることで終わりません。このパンを分けていただいた皆が一つになるのです。そしてお互いが導かれ、復活されたイエス様の御前に行くことになるのです。だから私たちは、迷宮の中にも、平安になることができます。イエス様の御言葉と聖餐が、私たちの信徒の交わりが私たちを最後まで導いてくれるからです。エマオに向かっていた弟子たちに現れたイエス様が皆さんのところにも現れますように。イエス様の御言葉と聖餐が私たちの霊的な目を開かせてくれますように、主の御名によって祈ります。アーメン